[illegible] 二 南

207

江戸みやげ二編の叙

東都のぬかるみなりけり夕暮の。空までも
廣き武蔵野じ。よくよく昔時ハ目に見ぬ世なり
はなし。今ハ艸より猶まして繁き家の並ぶ
大路あまたべ。月ぎ屋根より屋根は入。煙華
まはまでも自然。さんど昔の名所さへ。つまく
埋れぬ名高くなりの。都下の志んぶんかく[illegible]の。勝

繪本江戸土産 二編

廣重筆

金幸堂梓

目ふよりて足おくらぬ運ぶ遊楽奇観の佳
境も宿し。今屋重ねその中にわたりものを描
出して妙手を揮ひ描くは。生京の名勝。
未ご見ぬ人にも眼のあたり見するが如き江都名所遠
近に境の絵なるは。其の妙といふべきもの成

庚戌夏日

應需

松亭漢川父誌

富が岡の牡丹

八幡宮の
庭中に
古今絶品の
牡丹花あり
色香匂ひもふかく艸
葉の写生ことにえて見
るべし

富ヶ岡八幡宮

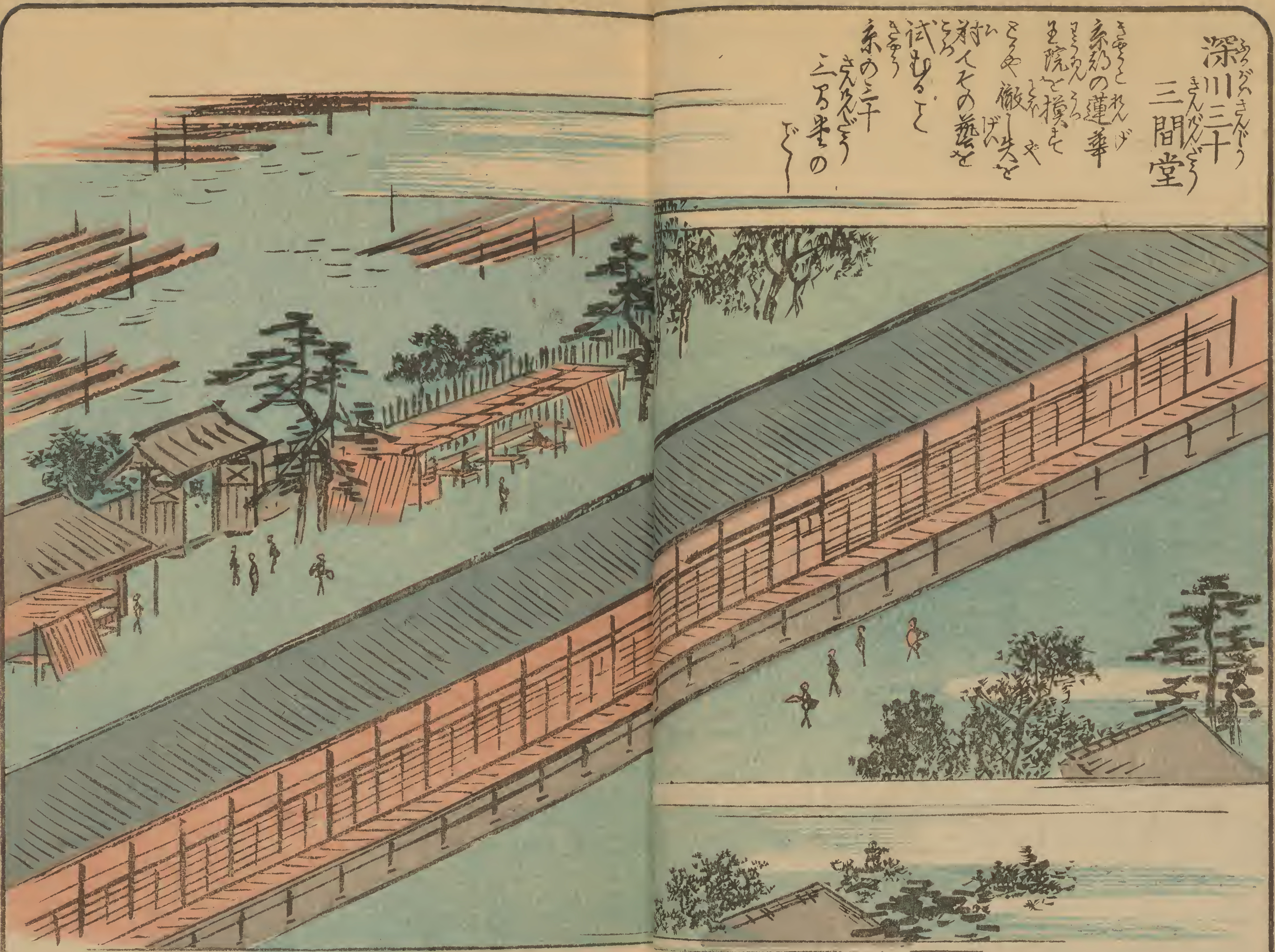
この宮居始めは砂村の
海浜旧跡元八幡と唱る
地にありしを寛永の比
長盛法印といふものの
示現によりてここに
うつし深川の
惣鎮守として祭礼
八月十五日
旧時の群参
ことさら賑し

其二 同所山開

冨が岡の
別当の園中
景色いとよし
常にハ入ることならず
年々山開きの
時にあたりて
縦に拝観
せしむ

深川三十三間堂

京都の蓮華王院を摸してとかや徹し矢を射人その藝を試むること京の三十三間堂のごとし



洲崎弁天

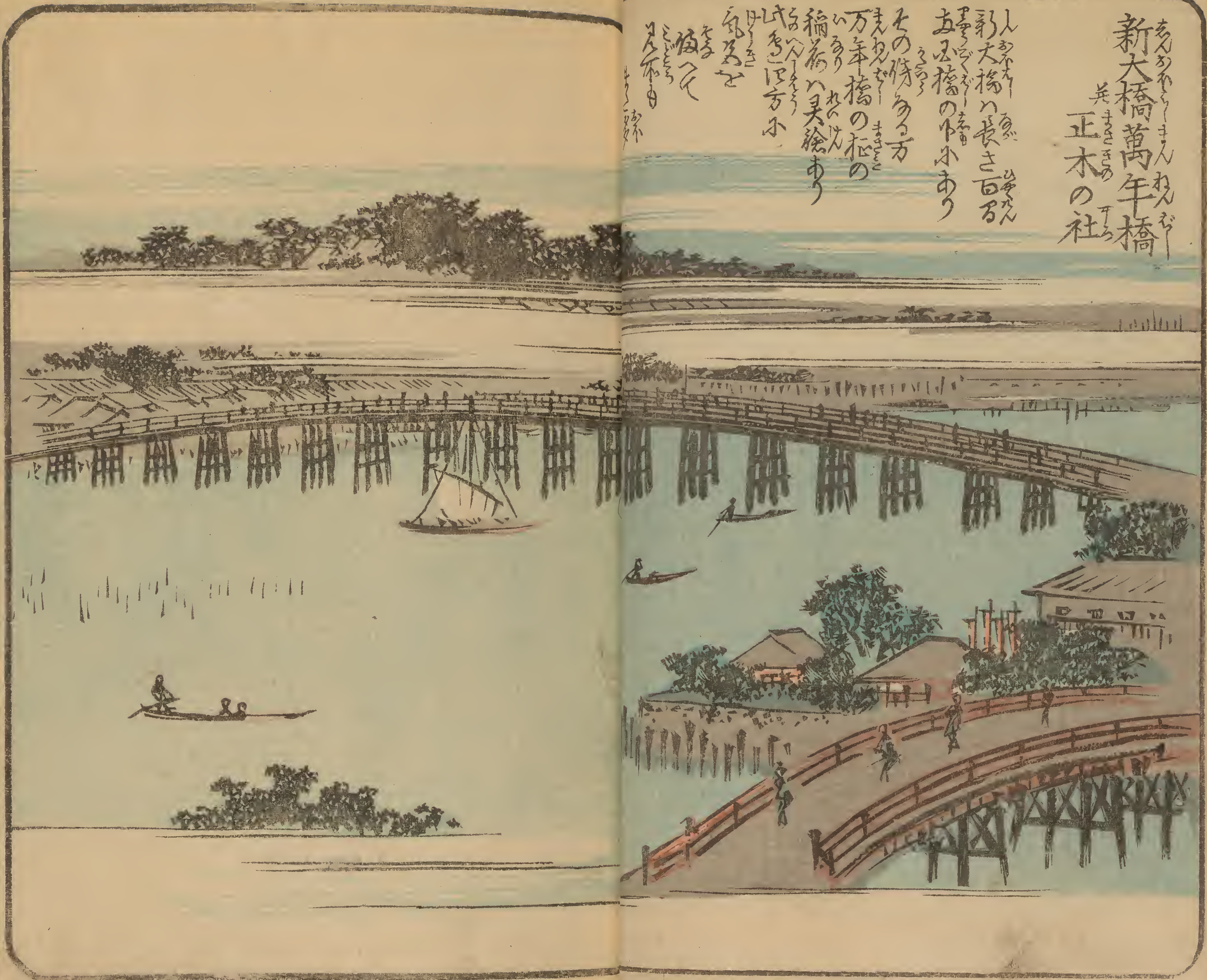
元禄年間
この海濱を
築立て
護持院
大僧正隆光
弁才天の宮居を
建る春秋
遊人こゝに
群集せり

深川木場（ふかがはきば）

この辺（へん）材木屋（ざいもくや）の蔵（くら）多（おほ）くあるより名（な）を木場（きば）といふ その園中（ゑんちう）おの〳〵泉水（せんすい）の多くありて風流（ふうりう）の地（ち）と称（しやう）せり

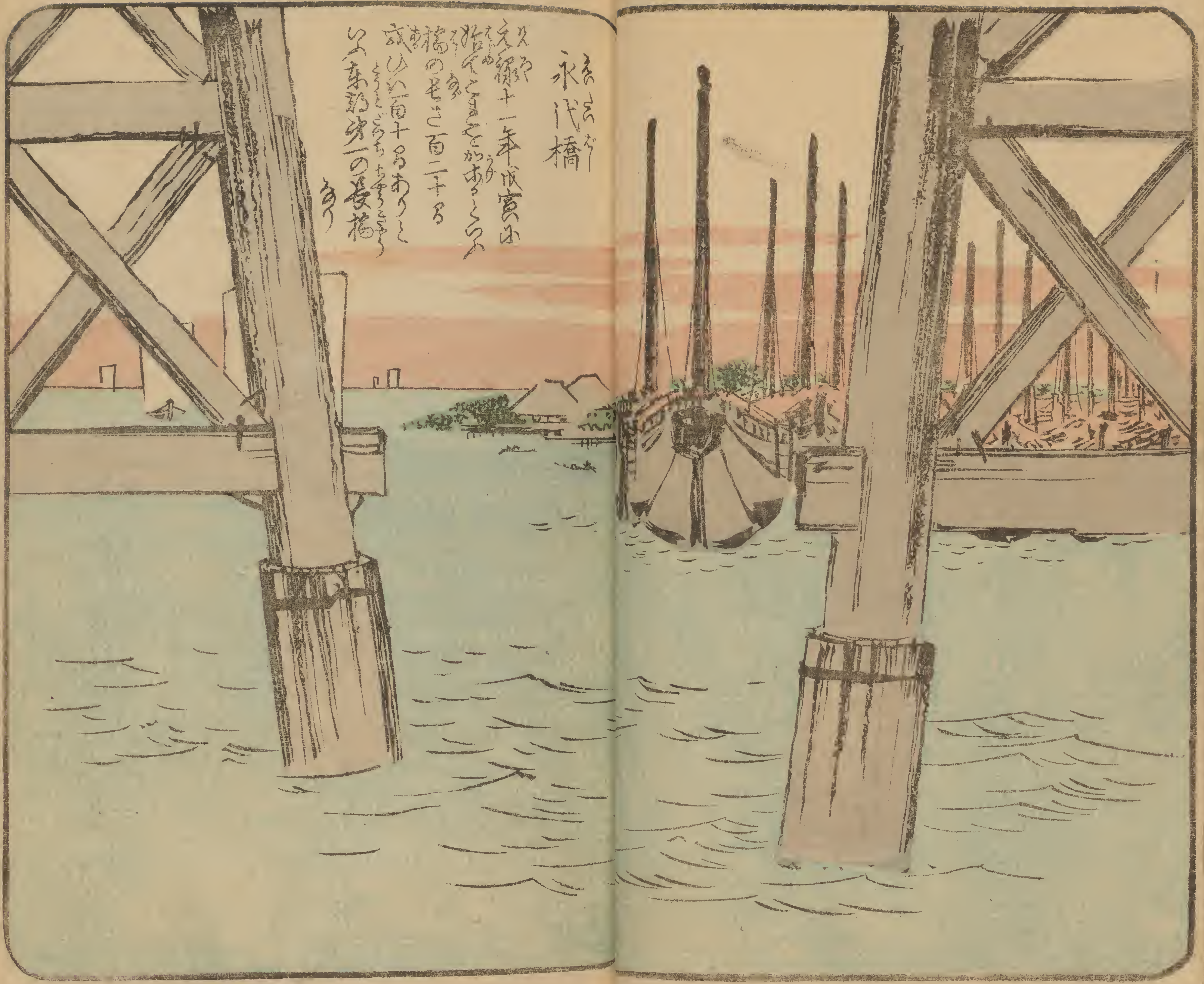
新大橋萬年橋 并 正木の社

新大橋ハ長さ百間
両国橋の下にあり
その傍らに万
万年橋の松の
稲荷ハ霊験あり

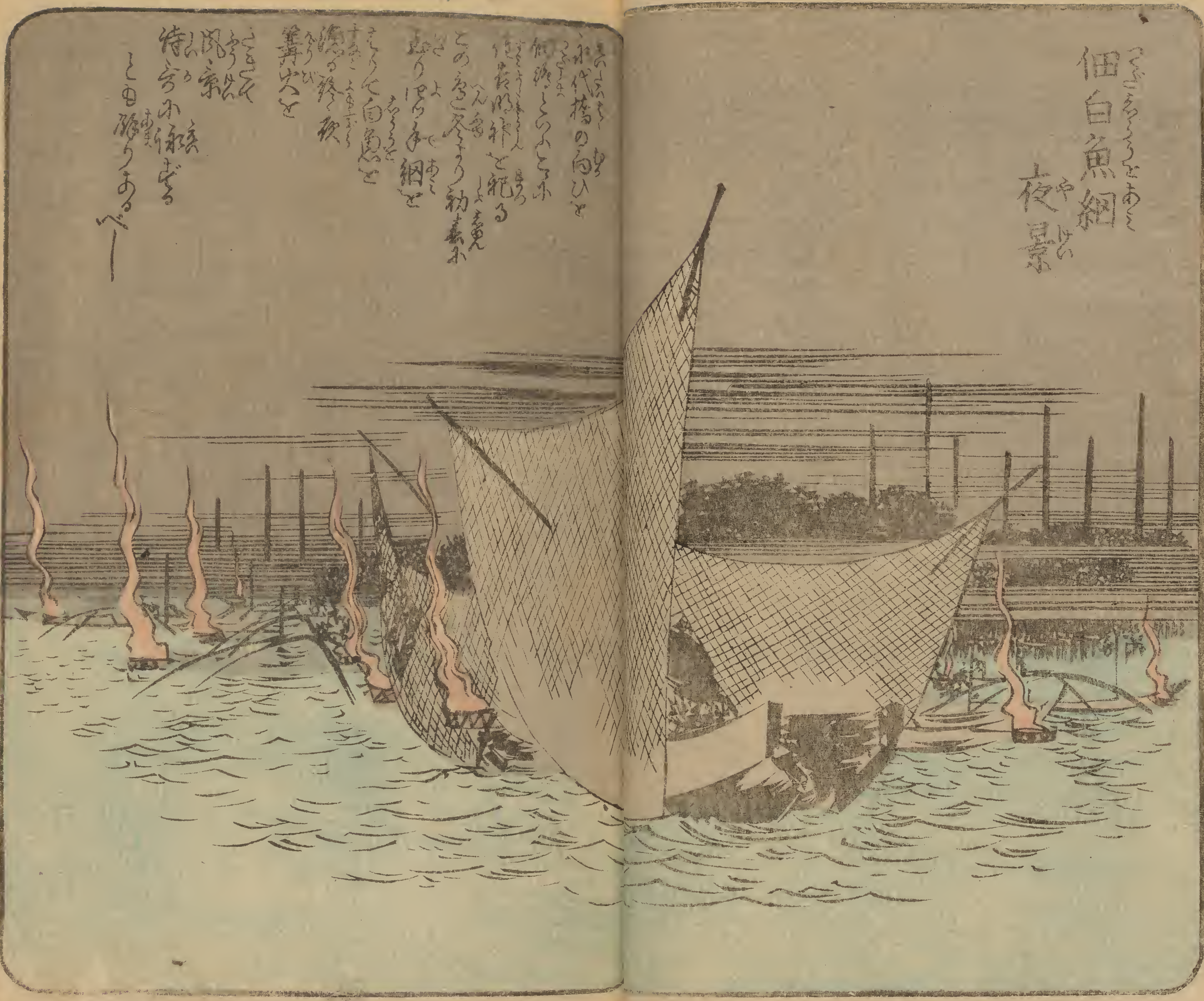


中洲三ツ俣

新大橋より南の方むかふに茶店ありて其繁昌いはんかたなし今は取払ひて洲となりしかど秋月夜の風景よし



永代橋
元禄十一年戊寅に始てこれをかけらる
橋のながさ百二十間
或ひは百十間ありとして
東都第一の長橋なり

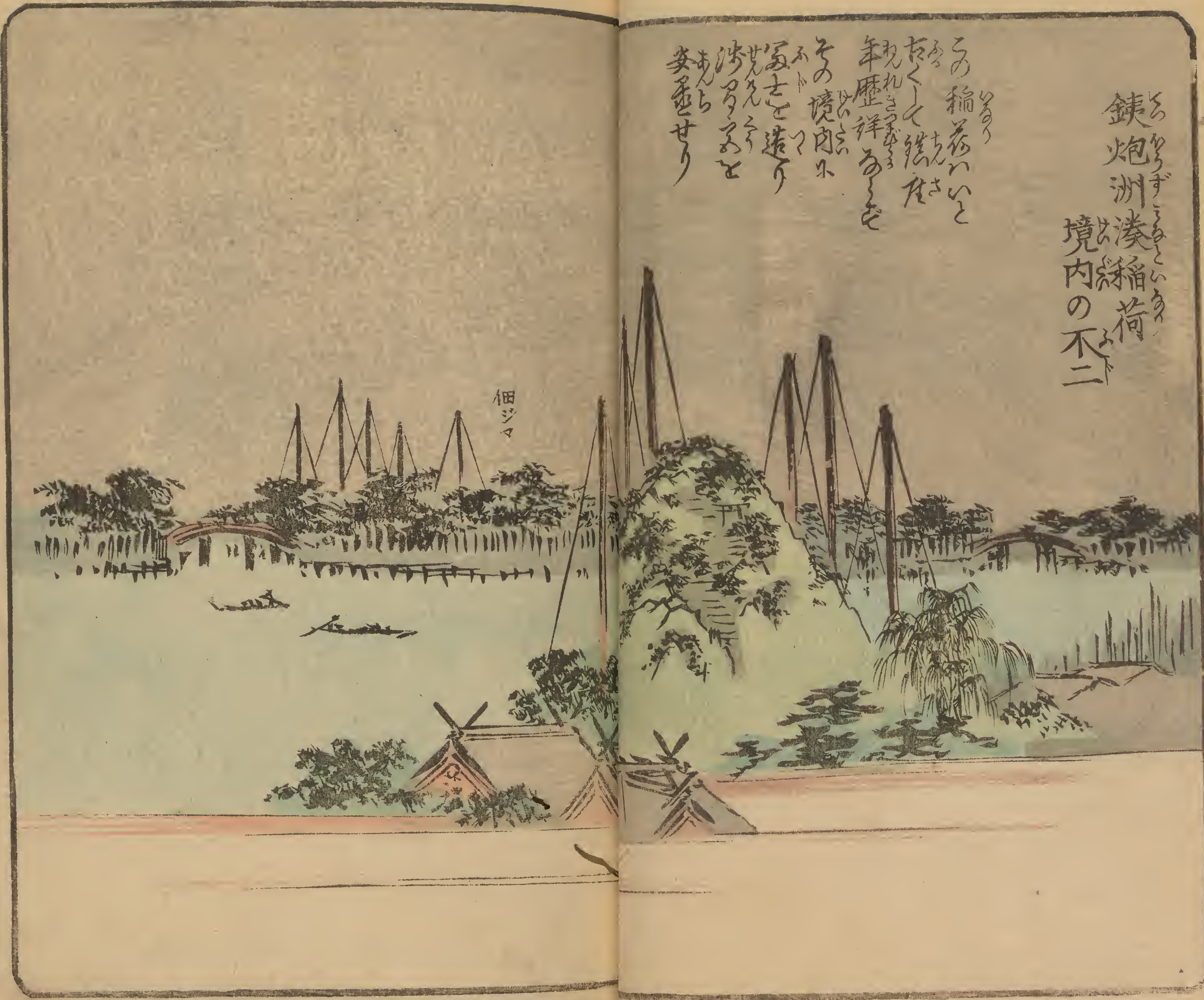

佃白魚網夜景
永代橋の向ひを
佃島といふ此
住吉明神を祀る
人家この辺冬より初春に
及びて手網を
もつて白魚を
すなどる漁の様
篝火をともし
こゝに名所
風景
侍らん漁舟に
と由縁あるべし

同所狼煙打上の図

毎年夏の末より
諸所にありとの噂出て
狼烟の警古あり
郊外の老若扁舟に
棹して是を見物を
家も湖水の群衆の
盛深がし

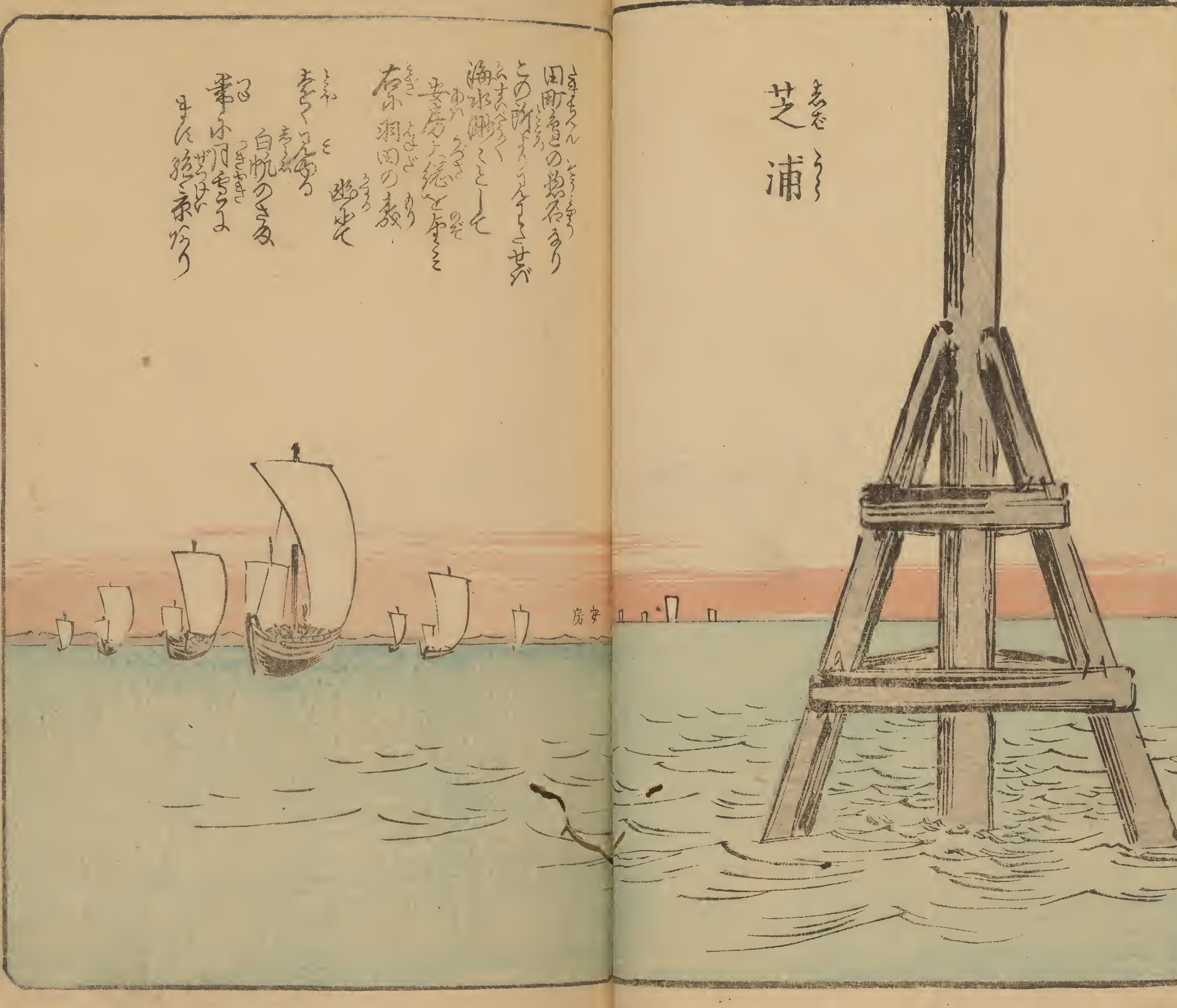
鉄炮洲湊稲荷境内の不二

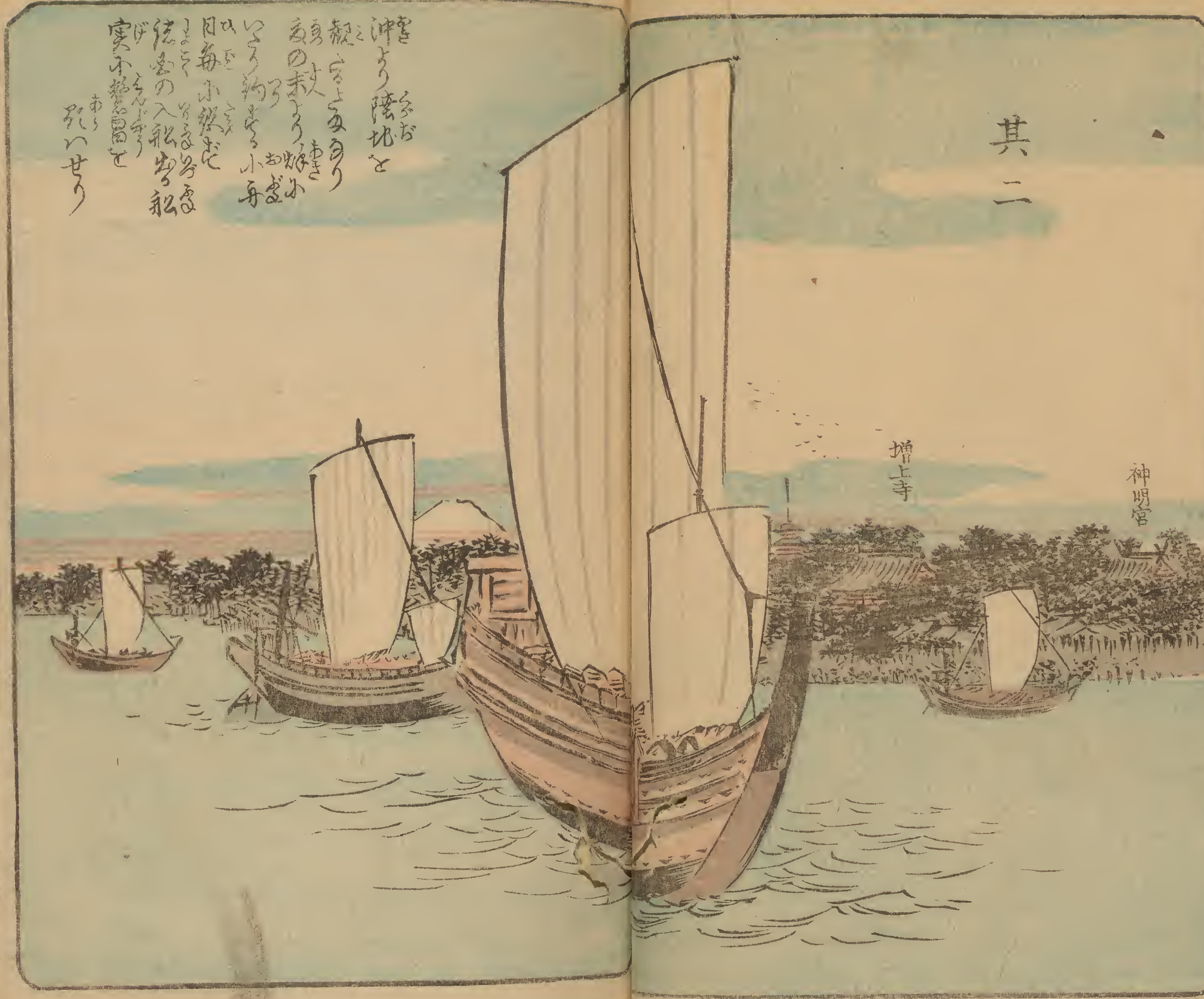
この稲荷ハいと古くして鎮座年暦詳ならず その境内に富士を造り 浅間を安置せり

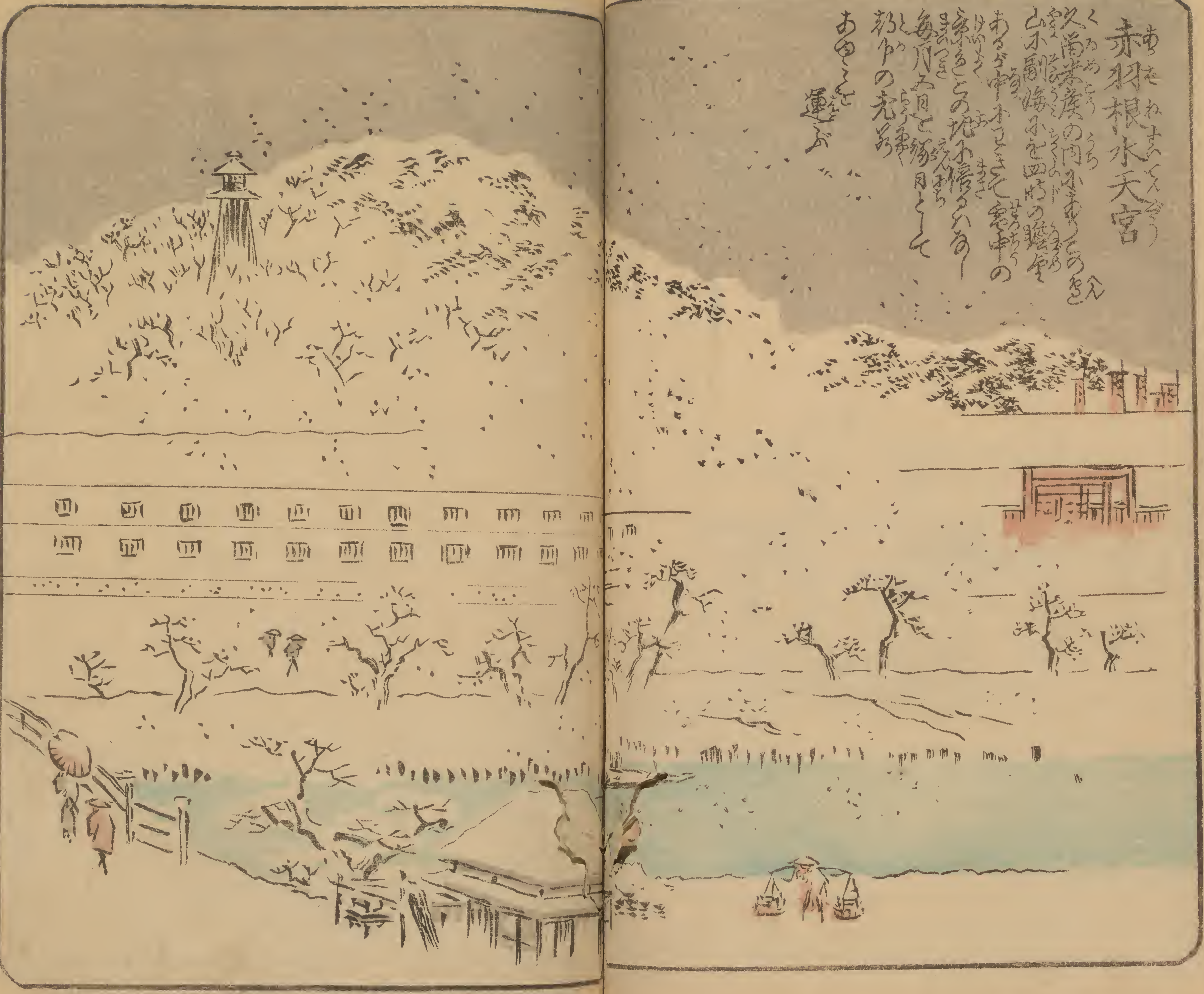


芝浦（しばうら）

田町通の海岸にあり
この所より見わたせば
海水渺々として
安房上総を望み
品川羽田の森
遥に見て
出入る船
白帆のさま
雪は月夜などは
また絶景なり




其二
増上寺
神明宮



赤羽根水天宮

久留米侯の内にありてその邸入
山に副海に望四時の眺望
あるが中にもことに霊験の
殊なることの外に信ずる人多し
毎月五日を縁日として
諸方の老若
あゆみを運ぶ

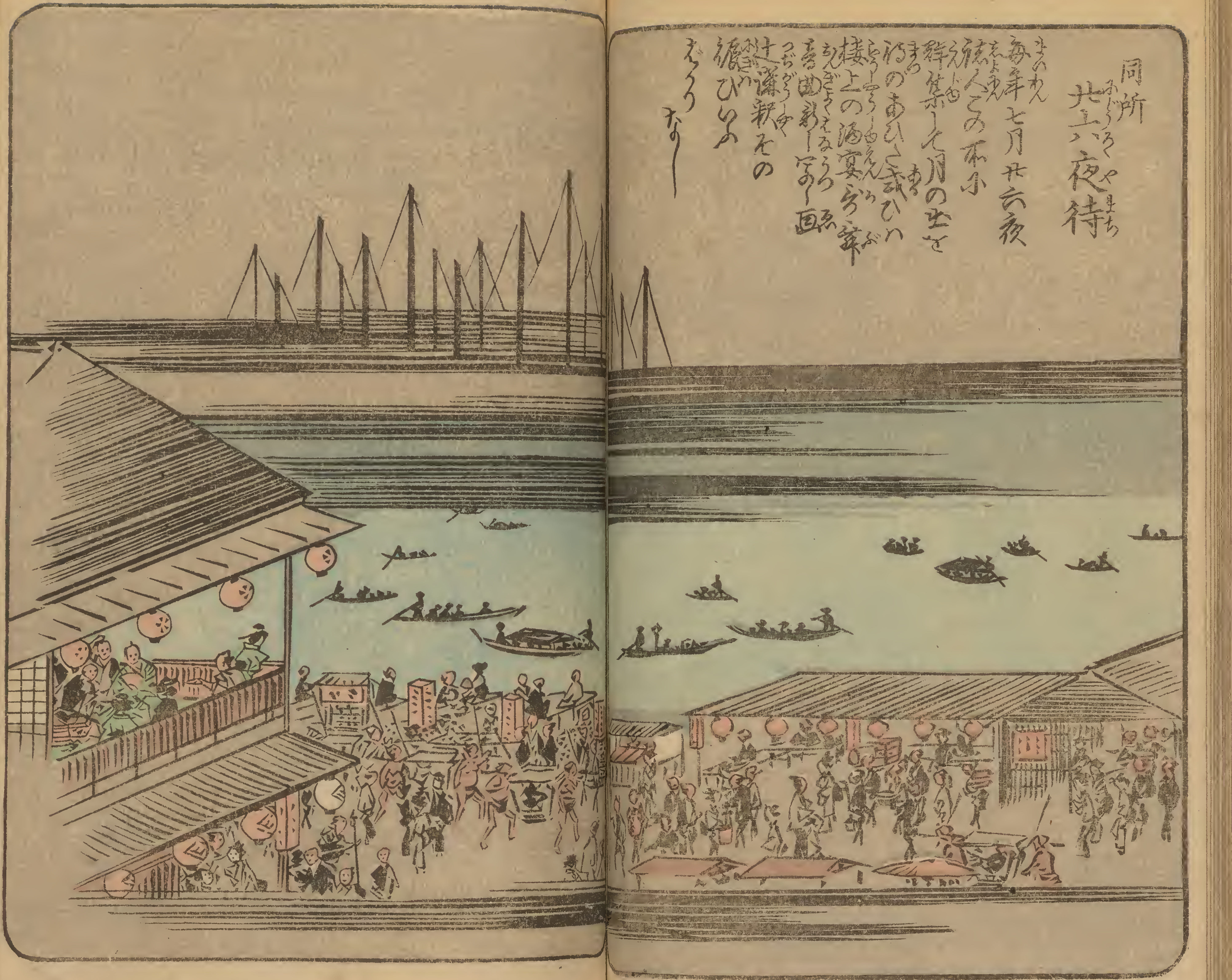
高輪の光景

田町より末品川宿の入口まですべてこれを高輪といふ海上の絶景袖浦にあらその

同所

廿六夜待

毎年七月廿六夜遠近この所に群集して月の出を待のあひだ或ひハ楼上の酒宴に歌舞音曲新し宇の画辻講釈その賑ひいふばかりなし



同所 月の岬
この所ハ八山
東南ハ海面に
して万里の
波濤眸を
さへぎる物なし
中秋の月の
此の眺めを
最第一とし
月の岬の名も
空しからず
八ツ山

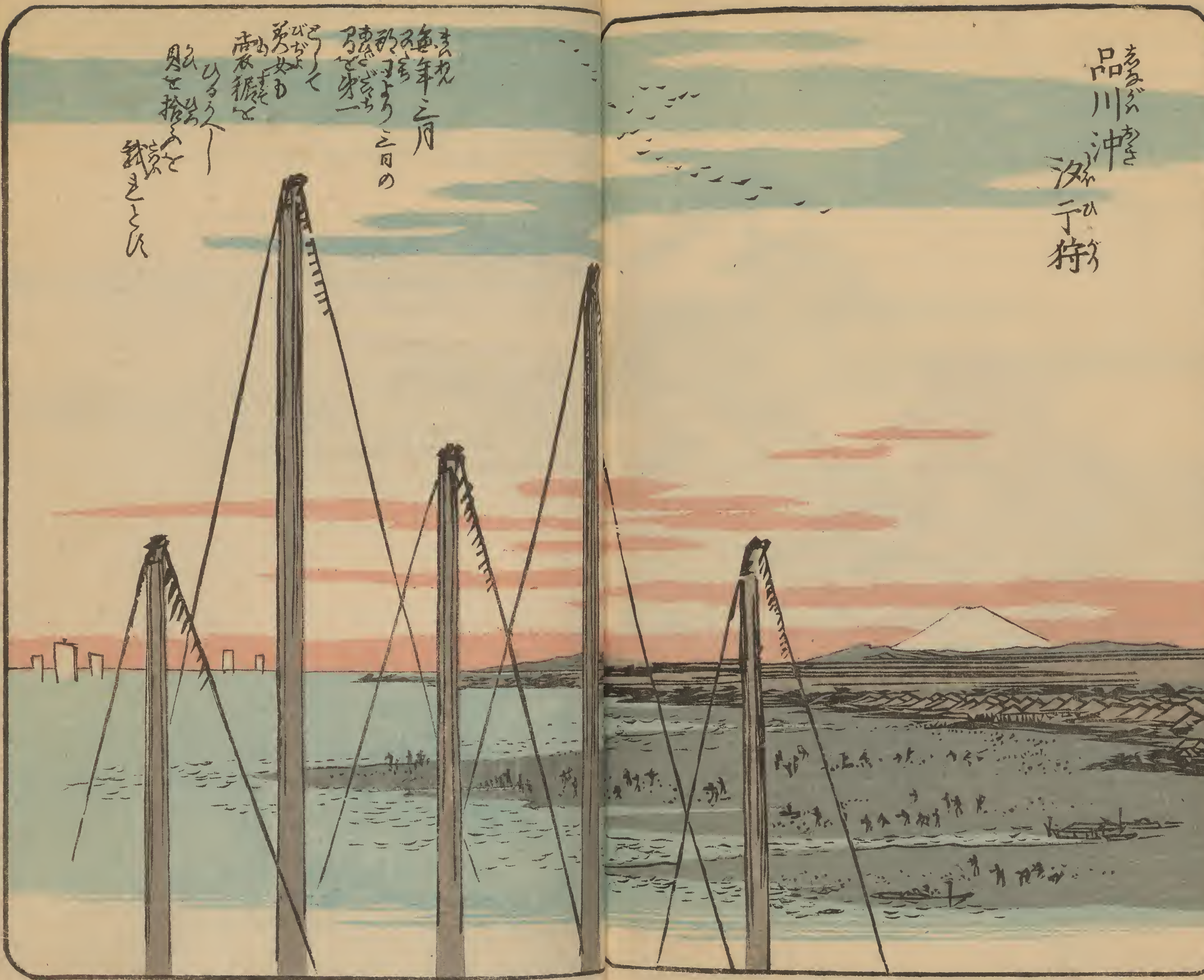
御殿山の花盛

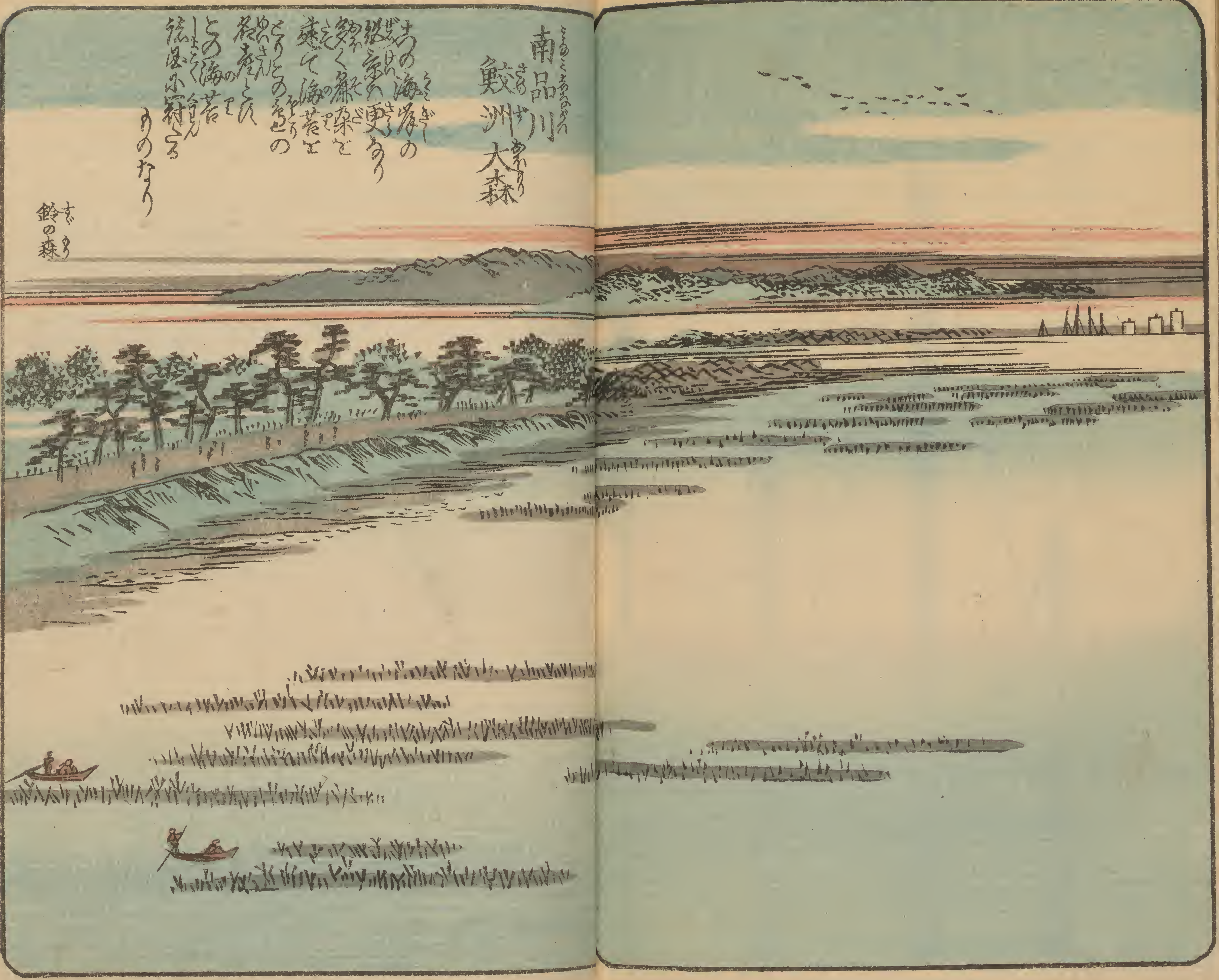
寛文の頃とか和州吉野の桜木をこゝに移させられしより盛の頃の遊ひは他に比ぶるものなし

其六二
境内は元和のそのむかし僧耕の庵ありしにより御庵主とぞ名にあへる左は深川洲崎の堤を望み右は遥に安房上総かすめる春の眺望殊更景色あり
深川スサキ
房総

品川海晏寺の紅楓

曹洞派の寺院にて境内の物ふりたる古名高き楓の染るところハ二月の花にも倍りとして詩客の騒人雄ざるハなし


品川沖汐干狩
毎年三月
頃より三日の


南品川 鮫洲 大森
此海岸の漁家へ更なり多く麁朶を建て海苔をとりこの辺の名産とし、この海苔を諸侯へ献ずるものなり
鈴の森

蒲田の梅園
この辺すべて梅園多し
春如月のころ花さかりなれば
清香よもに馨しく
紅白の花もゆきのごとく
実に絶観の勝槩なり

大森の土産

梅の名産あるによりことごとくとりて梅びしほとなし往路の人の求めに応ぜてその塩やさゝ漬まで名物とし

廣重筆

繪本江戸土産初編

一立齋廣重筆

遠く東都に名高かる名所の地域をこれとあに掲げ出して其図に写し、まづ遠国他郷の人よその地理及び風光をしらしめんとその需に応ずれバ江戸土産と題して去ぬる寅の歳に梓に彫ていて二編三編も物しぬれど果稼なく売に観融の笑に擢りし彫板遠きをも為有くるべき書肆の金峯堂再び故人の意をつぎて後世の功をもあり。ぬ先ぞ初編ハ大江戸の東南の方にて八ツ見橋より始まり、武国より上を隅田川東西両岸の名所古跡あるひハ秋葉、柳島妙見の亀戸梅やしき。同じ中堂男女ヶ塔のほとりまで、さる吾妻の森の古跡いにしへより名高き漢の三囲堂中川木下川坂東太郎ぼ斯て峯の風景を悉くとらへて図しでまづ初編とはなしぬ

繪本江戸土産二編　一立齋廣重筆

あづまハ初編のつゞきにして、もれたる名所を集めたり。中にも富ケ岡八幡宮の境内より始まり、堂ハ三十三間堂、洲崎の社、新大橋、三俣、佃ハ白魚をとる篝火の景、其外清元が関の数寄屋をかけたる風景ハいふに及ばず、両国、若宮、小石川、駿河台、大森、羽田の景色、四方にかくれなき名勝の地を撰ぬきたれバ、実に江戸のみやげに疑ひなきものなり

繪本江戸土産三編　全

これまた二編の地つゞきにして、両国橋より千住、多摩川の流れの末に至る迄、六阿弥陀、厄除大師、羽田の弁天、池上、新田の社、目黒の不動、赤坂、おもて茶の湯、尾久の里は茶屋、王子稲荷の一本松、新井薬師の景、諸観音、山王、溜池の蓮、不動堂、十二社、権現、井ノ頭、すべて江戸の名所を巨細にあらはしたり

大日本年歴箋

神代天御中主尊に起り大化以前九州に年號ありし支干まで記せ

源氏一統志

この書ハ人皇五十六代清和天皇第六の皇子中務卿貞純親王の御子経基王、世に六孫王と称す。始て源の姓を賜しより相続て多田満仲、頼光、頼信、頼義、義家、為義、義朝、源家の大将武勇絶倫にして他に比する者なき功績のあらましを諸書より撰ひ集め、就中摂津守頼光朝臣大江山の酒顛を退治し、或ハ土蜘蛛を切の説、その臣世に四天王と称する勇士が傳、頼義父子鎮守府将軍として奥州十二年の闘戦ハ勿論、わかりやすき異説奇聞を揚げ、夫より以下左典

廐義朝が保元平治の擾乱の得失鎮西八郎為朝三位入道頼政が傳前右兵衛佐頼朝配所より起て終に日本總追補使となりたまふの実記且範頼義経の直傳より鎌倉五代将軍の治世尼将軍政子が政道北條氏が九代の執権夫より元亨建武の乱と尊氏義貞が武勇楠家の勲功忠節の傳足利代々治世の得失應仁文明の戦ひより文禄年間迄に至て星霜凡そ六百年餘の治乱興廃すべて源の其と称まつるもの上ハ将軍家より下ハ賎陋の士に至るまで掲げ出さゞるといふ事なし加之天慶の將門純友又ハ上平太貞盛田原の秀郷且奥州の宗任貞任平治の信頼平相國清盛入道内大臣重盛等其餘平家の上﨟下﨟新大納言成親卿俊寛僧都を始めとして幾許の名將勇士假令源家に拘らぬ人といへども経基王延喜七年元服あり

日本の大将軍武士の棟梁たるべしとて白旗一流螺鈿の御剣一振を賜りしより以来世の盛衰によりて源家興る時ハ平家廃れ平家盛なる時ハ源家衰ふ両雄並び立ざるの理なり源氏ハ在る無るの世といへ共書漏すことなく其の年歴の次第を逐て栄枯得喪詳に著しまた醍醐帝の延喜年中より以来武家の歴史なることハ過るものなかるべしさまた諸軍談を好むもの世の看官時代に就て夫々の書を索めんハ及びがたきの一統志一本を常に座右に傚しおかバ所在大部の書籍を輯て其要よく此中より繰出し煩ひを絶くあきらかなと調寶の軍記なりかし

書林
大坂心斎橋通博労町　河内屋茂兵衛
東都馬喰町二丁目　菊屋幸三郎　版